CATCH the NEW!

「俺は笑いを作っている。」松本人志、待望のライブビデオ発売だ。

デビュー当時どんな新人賞を受賞してもニコリともしないまっちゃんは「もっと嬉しそうな顔せんかい。」と審査員からよく説教されていたものだが、そういうシーンでこそ媚を売らない彼の美意識というか性分は、「ひょうきん族」でも「とんねるず」でもない「新しい」お笑いを象徴するものであったように思う。「媚びた笑いを提供する気などサラサラない。」出版社の始めの読みをあっさり覆し（初版はたったの5万部）書店売り上げを独走、120万部を突破したベストセラー「遺書」でもそう言っているように笑いを理解するにも「ある程度のオツムとセンスが必要」だと言い切る姿勢。「社交的なヤツの笑いは、オモロイじゃなくて楽しいだけや。」と真摯に「お笑い」を探し続け「話芸」でも「キャラクター」でもなく、切れ味と才能の一番要求される「発想」で笑かせてきた彼は、今日本で一番「笑いを取る男」と言っていいだろう。少なくとも私はそう思っている。

まだ猛暑の勢いさめやらぬ9月、そんな彼が行なった待望のライブが「寸止め海峡（仮題）」であった。前代未聞の一万円というチケット代でも話題になったが、それも「お笑いのライブも高い入場料を取るミュージシャンと同じ。」客側も選ばれるが演じる側も選ばれるという実に緊張感のあるチャートの上に立ってのことである。だがチケットを入手した人の中で誰がチケット代など気にしたヤツがいただろうか。それは発売後10分でソールド・アウト（わずか数枚の当日券を求めて公演三日前から徹夜組もでたという）という事実からも裏づけられている。そんな故で見逃した人もさぞ多かったことであろう。そんな人はもちろんのこともう一度じっくり楽しみたい人必見のビデオが早くも発売である。

作・演出・主演の三役をこなすのはもちろん松本人志。共演者に今田耕司、東野幸治、さらに板尾創路を迎えて上演したライブの新作コント6作品が完全収録されている。「寸止め」というタイトルが意味する如く「かゆいところに手が届かずはっきりしない」このライブでは、ボケとツッコミが絡むことはなく、ボケの限りを尽くすコントばかり。写真を見てまっちゃんがボケる「写真で一言」のコーナーこそ未収録だが、31才の松本人志の笑いの真骨頂とも言うべき気合いの入ったそのコント6作品は、もはやエクセレントの一言。これこそまさにお見逃しなくである。

私が取ったチケットの席は裏から手を回したにも関わらず後から三番目であったが、飛び散るツバや滲む汗はしっかりと見えた。最初のコント「引っ張る男」でまっちゃんが飛び出してきてから、最後のあいさつまで本当にゾクゾクさせてもらった。そのビデオがこないにすぐ出るなんて、ええ時代ちゃう？と思う。まっちゃん、あんた、ほんまにヒカってましたで。

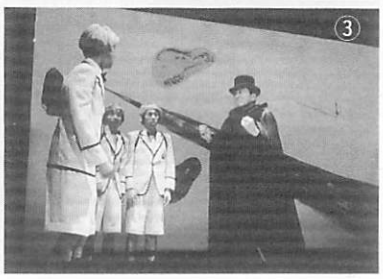
④

①

⑤

②

⑥


③

①「恩返しされた男」
家で酒を飲んでいる板尾の部屋に現われた松本・今田・東野の三人の石鹸の精が救ってもらったお礼に舞を披露する。

②「ランジェリーヤクザの男」
ランジェリーしか身につけていない板尾と東野の車にオカマを掘った今田がからまれるうちに、今田の車に乗っていた松本が登場しボケたおす。

③「赤い車の男」
電気・水道・ガスと呼ばれる今田・東野・板尾の三人の少年の前に現われた男・松本とのシュールなコント。

④「柳田という男」
東野が演じる柳田という生徒がタバコを吸ったと職員室で松本扮する先生に怒られる。柳田の母親役には今田、体育教師板尾を交えた学園不条理コント。

⑤「引っ張る男」
突然舞台にコンビニ帰りらしい今田を引っ張り込み、力尽くで引っ張りあう松本。逃げられると板尾、東野と引っ張りこむサイレント・コント。

⑥「大病の男」
今田が主演した、耳からバイ菌が入り頭が異常に大きくなってしまった少年を描いた病院コント。

『寸止め海峡（仮題）』
1／20発売¥14,214（税込）
フォーライフレコード

文／端井由紀子

CATCH the NEW!

ジャミロクワイ
20世紀最後のカリスマ、ジェイ・ケイ率いるジャミロクワイ再来日。

「俺は、ハゲじゃないぞぉ！」と、某フェスティバルでトレードマークの帽子を脱いだジェイ・ケイくん。セカンド・アルバム『スペース・カウボーイの逆襲』も好調、その上、自らデザインしたエコロジー洋服ブランド“オレンダ”販売にも乗り出して、相変わらず話題には事欠かないようで。そんなジャミロクワイ、チケットがあっという間に完売となりその異常人気を決定づけた初来日からはや1年半。前回見損ねた貴兄はおまたせ、待望の再来日が決定した。

シングル『WHEN YOU GONNA LEARN?』で世界のクラブ・シーンを掻き回し、イギリスで“セックス・ピストルズ以来の衝撃”と呼ばれた彼ら。新しい世代のカリスマ誕生として、今度の来日ではまた違う側面を見せてくれそうだ。追加公演も決定している。日程は左記の通り。

■ジャミロクワイ
3月7日（火）
大阪厚生年金会館大ホール
開場18：30PM　開演19：00PM
（全席指定）6000円

（追加公演）
3月9日（木）
IMPホール
開場18：30PM　開演19：00PM
6000円
問　H・I・P・大阪
★06・362・7301

トム・ロビンソン
17年前。ゲイであることを、音楽で訴え続けたひとりの青年がいた。

トム・ロビンソンがやって来る。今でこそ、ゲイだバイセクシュアルだと、良きにつけ悪しきにつけ時流に乗って大騒ぎしているカミングアウト族の諸君よ。彼こそが、17年前に自らゲイであることを公表し、幾多の差別を受けながらもひたすらゲイ解放のメッセージを歌い続けた、カミングアウトのパイオニア（？）的存在であられるお方なのだ。

1950年。イギリスのケンブリッジに弁護士の息子として生まれたトム・ロビンソンは、子供の頃から自分がゲイであることに悩み続け、自殺未遂や施設送りを経験する。青年時代を苦悩とともに過ごすうち、最初のバンドCAFE SOCIETYを経て、トム・ロビンソン・バンドを結成。1977年のデビューは、社会にとっても音楽業界にとっても、非常に衝撃的な出来事だった。当時、小学生だった私のお気に入りは、やはりこのヒット曲『2-4-6-8 MOTORWAY』で、意味もわからず、ひたすらに聴いていたのを覚えている。そして彼が「ゲイであることに誇りを持て」と歌った『GLAD TO BE GAY』で初めて、ゲイとはどういうことかも教えられた。彼の人柄を表す、初来日の時のエピソードがある。トムは、ステージの上から客席を真っすぐに見つめて、カタコトの日本語で：こう言ったのだ。「ワタシハ、ヘンタイデス。オカシイデスカ？」。シンとなるオーディエンス。冗談とでも思ったのか、一部の客が大声で笑った。彼の切実なメッセージを本気で受けとめることができた人間は、あの時代、客席にどのくらいいたのだろうか。

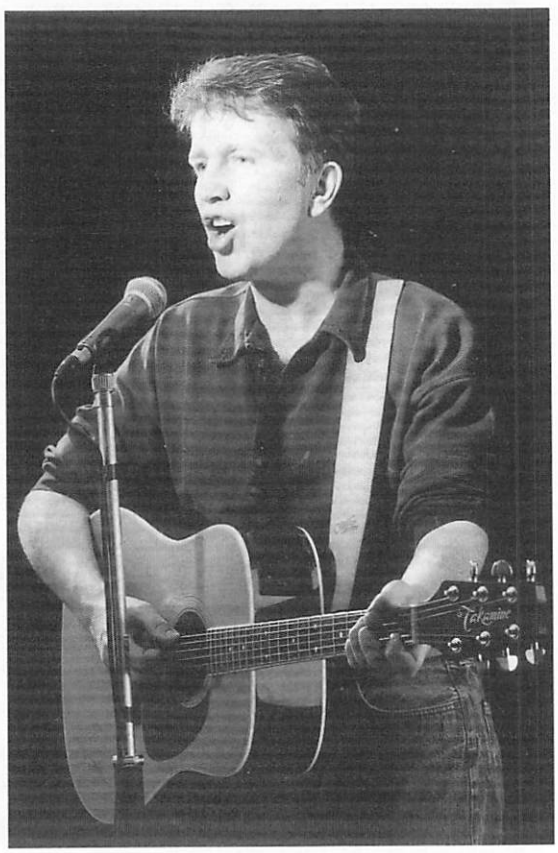
その後、トム・ロビンソン・バンドは解散。新たにSECTOR 27で再出発するが、こちらもうまくゆかずに空中分解する。ファンにとっては、やきもきさせられる期間があまりにも長かった。だがソロに転向してからは、地味ながらもイギリスで活動を続け、着実に支持者を増やしている。83年のシングル『WARBABY』などを聴いても感じるように、その力強い歌声とは裏腹の、繊細で透き通るようなそのメロディ。決して彼が、ゲイという話題性だけで音楽界を生き伸びてきたのではないということがよくわかる。

40代半ばとなり、熟年の渋みも加わったトムではあるが、近頃1番の話題は、どういうわけだか結婚し（相手は女性なのだ！）昨年には子供まで出来てしまったことだ。あんなに口角泡を飛ばして「ゲイに幸あれ！」なんて言ってた姿は一体何だったのかね？この裏切り者〜！と泣き伏してみても仕方がない。人間は成長と共に変わるのだ。本人は「今の僕はバイセクシャルだ」なんて言ってるらしいけど、まぁいいか。

久々の来日。新旧のファンが集まるであろうステージで、再びあの人間臭いボーカルに会えるのを楽しみに待ちたい。

文・木村紀子

■トム・ロビンソン
3月4日（土）
心斎橋クラブ・クアトロ
開場18：00PM　開演19：00PM
前売5000円　当日5500円
（1ドリンク付）チケット発売中
（チケットぴあ、チケットセゾン、心斎橋クラブ・クアトロ）
問　SMASH WEST
★06・361・0313
心斎橋クラブ・クアトロ
★06・281・8181



フォレスト・ガンプ ～一期一会～

95年アカデミー賞最有力候補作品と評判高い、トム・ハンクスの新作。

優しくも可笑しく、そして悲しくも温かい。人生で味わう全ての感情が余すところなく織り込まれていて、特に泣きを強要する場面もないのにただただジワ～ッと胸がいっぱいになってしまう。笑いを何より得意とするロバート・ゼメキス監督に、これほど切ない映画が撮れるとはやや意外か。

母の手ひとつで育てられたフォレスト・ガンプは、頭が少し弱いが純粋で人を疑うことを知らない青年。そんな彼の無垢な行動は、自然に振る舞えば振る舞うほど人々の目に奇異に映り、常に周囲の注目を集めてしまう。いつしか彼は、自分でも全く気がつかない間にあれよあれよと世間の有名人になってゆくのだった。ふむ、どこかで聞いた覚えがあるストーリー展開。そう、これはまさしく故ピーター・セラーズの遺作『チャンス』ではないか！だからというわけでもないが、いかにもアメリカ人の好きそうなヒューマンタッチの映画である。セラーズの恐ろしく純真で世間知らずな庭師と同様、汚れを知らぬ心の持ち主フォレスト・ガンプは、遥か昔に失われた、古き良き時代のアメリカの良心そのものなのではないだろうか。全編に流れる音楽も、作品の舞台となる激動の時代、50～80年に流行ったヒット・ソングの数々。好きなひとには涙モノである。

主演のトム・ハンクスは『フィラデルフィア』でオスカー獲得、シリアスな演技で今や押しも押されぬ名男優である。しかし『スプラッシュ』『マネーピット』『ビッグ』などコメディで見せたお茶目なベビーフェイスぶりのほうは最近ごぶさたで、いまいちものたりなくもあった。が、今作では、彼にしか出せないあのオトナコドモの持ち味が十二分に生かされていて、非常に嬉しい。やはり彼の魅力はここにある。最後に、この作品にはストーリーの途中でアッと驚く仕掛けが用意されている。期待して見てのお楽しみだ。

●2月中旬スカラ座で公開予定

ザ・パンク

14歳の怒れる少年が書いた、世界初のパンク小説。

「なんと愚かなんじゃ今の若いもんは！」などと言ってはいけない。そういえば、自分も若い頃は同じようなことを考えていたな～なんてふと振り返ってみることが出来れば、この映画を観た甲斐もあるというものだ。もちろん主人公と同年代のあなたなら「うん、わかる！」と頷けるかもしれない。

原作は70年代末、イギリスで“パンク世代のバイブル”と称された伝説的小説『ザ・パンク』である。作者ギデオン・サムズは、当時なんと中学生。セックス・ピストルズやクラッシュに傾倒する、優等生には程遠い反抗的な少年だった。彼がノートに書きなぐった挙げ句にゴミ箱行きにした小説を、母親が発見。出版社に売り込んだところ大絶賛され、突如14歳のパンク作家が誕生するのである。「安全ピンをつけたロミオとジュリエット」との宣伝文句をつけられたこのストーリー、特に目新しいものではないのだが、十代の一途な恋愛がまっすぐに伝わってきて好感がもてる。学校にも行かず、かといって定職にもつかず、将来の夢もない少年が恋をする。だが相手の少女は自分とは世界の違うお金持ちのお嬢様。両親のヒンシュクを買いながらも愛し合う二人の恋の行方を、監督マイク・サーンは原作の新鮮さを損なうことなく描ききった。主演のチャーリー・クリード・マイケルは『ロンドン・キルズ・ミー』にも出演していた20歳の新鋭。泣きそうなタレ目とスレンダーな体が頼りなげ。どこにでもいそうな典型的イギリスの男の子という雰囲気が、かえって新鮮でなかなかよろしい。70年代である原作の舞台を現代に変えているとのことだが、今も若者の絶望を抱え続けるイギリスはパンクが生まれた20年前とあまり変化はないようで、そのへんも興味深い。なお原作者のサムズは、その後中学を退学。バンド活動などで自らの道を追い続けるが、わずか20代でドラックのためにこの世を去っている。

●大阪は2／11より扇町ミュージアムスクエアで公開。京都は春休みロードショー。

ナチュラル・ボーン・キラーズ

風刺の効いた、狂暴でクレイジーな壮絶殺人カップルのストーリー。

映画を見るときキャストで選ぶか監督、さもなくば総指揮、脚本などのスタッフで選ぶかは意見の分れるところ。話によるとタランティーノがビデオ屋の店員をしていた頃買い上げられた二つの脚本、一つはもちろんトニー・スコット監督のトゥルー・ロマンス、そのもう一つが「ナチュラル・ボーン・キラーズ」である。どちらかといえばタランティーノ原案で話題先行の本作だが、トニー・スコットがタランティーノのエンターテイメント性とわりあい協調したのに反し、本作はかなり監督色が前面に。タランティーノお得意の意味のない会話、撃ちまくり殺しまくりはもちろんあるのだが、テイストはしっかりオリヴァー・ストーン。「プラトーン」「JFK」などしっかりとメッセージのあるものを作ってきた社会派な彼のチャートは今回もきっちりしかれており、罪の意識のない大量殺人犯や彼らをヒーローに仕立てあげるマスコミへの風刺が感じ取れるものになっている。だがそれがせっかくのタランティーノのエンターテイメント精神を多少心気臭くさせているのも確か。反面、今回特筆すべきと思われるのが凝りに凝った技法だ。映像はカラーからモノクロ、35ミリから16ミリの荒い画質へとめまぐるしく変化。合わせて音楽もロック、オペラ、ポップスなどの75曲ものスコアが全編を埋め尽くす。さらにアニメーションとの合成、シットコムパロディ（公開録画の臨場感を出すために録音しておいた観客の笑い声などを被せる方法）などを駆使した3000以上ものシュールな映像が絶え間なく挿入され感覚を麻痺させられるという趣向。それでかどうか狂暴なキャラクターに相変わらずのイノセンスなルックスを合わせ持つ壮絶殺人カップルの女役マロリーに挑んだジュリエット・ルイスの「イタい」女ぶりもこの映画の中ではナチュラル。だが全体でいうとやはりオリヴァー・ストーンのシビアさとタランティーノの理屈抜きの娯楽性が合殺しあっているのは否めない。もっとエンターテイメントに撤してもよかったと思うのだが。

●2月中旬公開予定

写楽——それは一体、誰だったのか？

寛政六年（一七九四）。幕府の強い支配下におかれながらも、今日の文化を切り開いてきた多くの芸術家たちが、自由に表現活動を繰り広げていた時代。まるで地からふって湧いたように、突然人々の前に現われ世間を騒がせたあと、その後は何故かぷっつりと消息を断った、ひとりの男がいた。異色の歴史的浮世絵師・写楽そのひとである。

喜多川歌麿、葛飾北斎など、江戸文化の最盛期を賑わせた芸術家は数多いが、この写楽ほど謎の多い人物はいない。まったくの無名でありながら何故か異例の鳴物入りデビューを果たし、絵師としての実質の活動期間はわずか十カ月。にもかかわらず、その間残した作品は百四十点余りにも登る。そしてその後はまるで燃え尽きたかのように、彼の姿は歴史上からきれいに消えているのである。その人生については、今日の研究で挙げられているものだけでも三十一の仮説、そして現在でも次々と新説が登場している。彼の生きざまは、まさにミステリーとしか言いようがない。皮肉にも写楽の卓越した芸術性を最初に見い出したのは、日本より海外が先である。ドイツの美術研究家ユリウス・クルトにより絶賛され、それが逆輸入の形をとって再び日本に入ってきたのだ。写楽が祖国日本で正統な評価を得るには、優に百五十年という年月を要したのである。

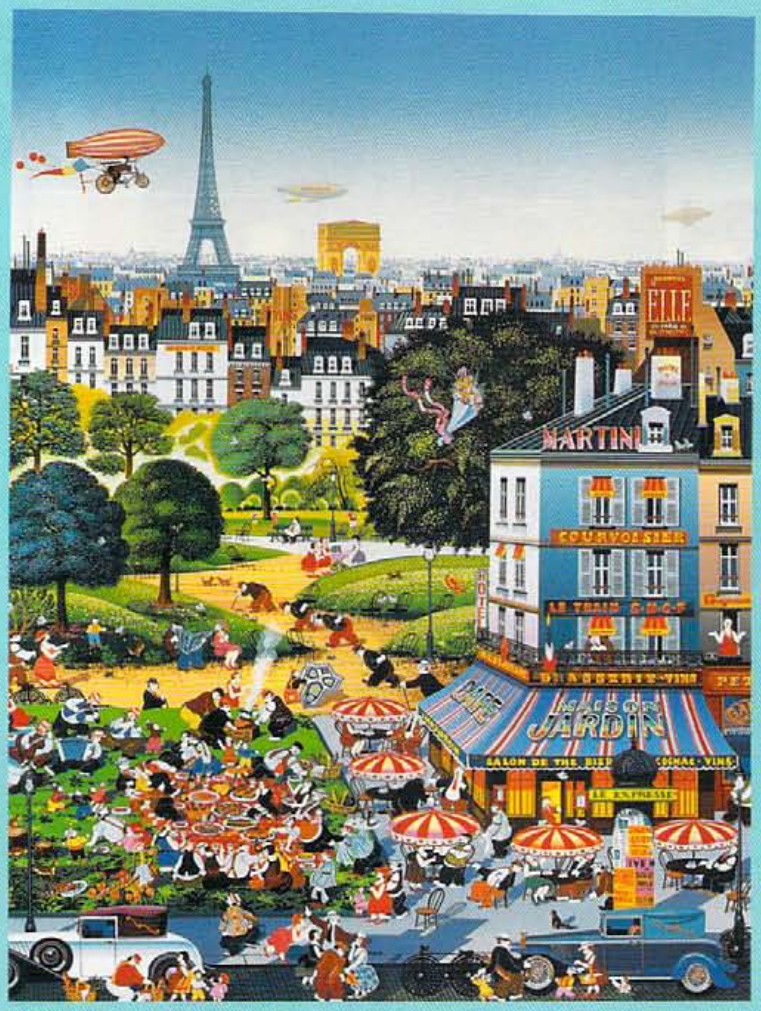
さて、この謎に包まれた浮世絵師の姿を大胆に描いた作品『写楽』が公開される。後世に残る芸術遺産を生み出して消えた、写楽とは一体何者だったのか。映画は、この永遠の問いを大胆な推理で追求してみせる。

寛政三年の江戸、場所はある歌舞伎小屋。下っ端役者ながら、きらりと光る素質を持った男（真田広之）がその日、市川團十郎の舞台の乱闘場面で見事な宙返りを見せていた。その時、男の人生を変える出来事が起こる。偶然の事故か、はたまた仕掛けられたものか、團十郎の乗ったハシゴが男の足の上に落ちたのだ。次の瞬間、男の足の骨は砕け、彼は二度と舞台には上がれない体になってしまう。自暴自棄になっているところを町の大道芸人の女親分おかん（岩下志麻）に拾われ、"とんぼ"という名をもらった男は、町芸人として第二の人生を生きることを決意する。だが彼の真の才能は、時折何気なく持つ筆が描く、驚くべき大胆な絵にあった。自分の能力に気づく様子もないとんぼに、江戸文化の活性化を計る地本問屋『蔦家』主人、蔦家重三郎（フランキー堺）が歩み寄る。彼こそ、とんぼの実力を見抜き、江戸一番の名浮世絵師に育て上げた親であり、仕掛け人であった。かくして「しゃらくせぇやい！江戸っ子だ！」から取ったという名前「東洲斎写楽」を名乗るとんぼは、世間からは姿を隠したまま、重三郎のもとで多くの傑作を生み出してゆく。宿命の競争相手、歌麿（佐野史郎）との戦い、そしてひと目で互いに魅かれ合った、吉原の花魁花里（葉月里緒菜）との出会いなど、写楽を取り巻く歴史の渦は、栄光、そして絶望をも織り混ぜて、その波を大きくしてゆく。

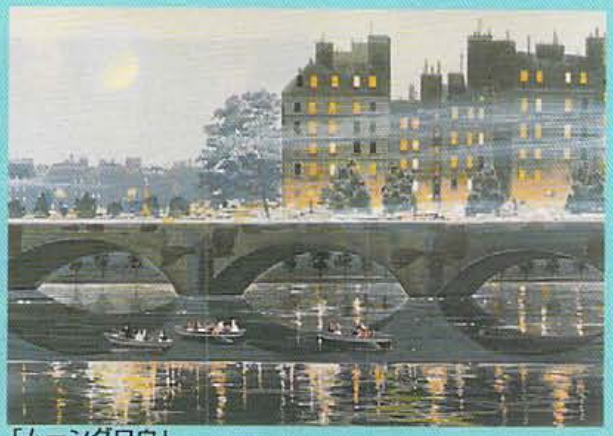
企画・総指揮に、長年写楽の研究に携わり、自らに著書『写楽道行』を持つというフランキー堺。写楽を映画化するというアイデアは、なんと30年も前から考え続けていたというからその思い入れもたいそう深い。監督には『瀬戸内少年野球団』『少年時代』の篠田正浩があたっている。

人並み外れた才能を持ちながら、不器用で自分に正直すぎるために自らを傷つけてしまうとんぼ。彼は本当に写楽だったのか。そうであれば、写楽として生きることは、彼にとってどのような意味があったのだろうか。当時の日本人の生活、そして江戸の街に築き上げられた、鮮やかな民衆文化。この作品は、そこに介在した人々の思いをまるで動く浮世絵のごとく捕らえた、実に見事な時代の絵巻物となっている。

●2月4日よりSY松竹京映にて公開予定



「ピクニックⅡ」


「ムーングロウ」

ヒロ・ヤマガタ　インタビュー
鮮やかな色彩に込められた、自然とテクノロジーの融合。

ヒロ・ヤマガタといえば、アメリカン・ドリームの実現者であり、今やその名を知らぬ者がないほどの世界的ポップ・アーティストである。昨年の12月半ば、未公開の7作品他多数が出品された展示会と、エイズ撲滅キャンペーンの一貫として先頃ロサンゼルスにて行なわれた個展レビュー『アースリーパラダイス』の記念紹介のために京都を訪れた氏に話を聞く。

Ｉ　京都でヤマガタ氏といえば、昨年の建都1200年記念のポスターを制作されたことでも話題になりましたが、ロサンゼルスで大好評だったという個展『アースリー・パラダイス』について、お聞かせ下さい。まず、このタイトルの由来は何でしょうか。

「イギリスの産業革命以降、世界は大きく変わりました。テクノロジーの進歩で私たちの生活もどんどんシステム化され、随分複雑になると同時に便利にもなっています。しかしその進歩はもともとが地下資源によるものであり、全てが自然のアレンジであったわけです。アースリー・パラダイスとは、文字通り"地上の楽園"という意味で、自然とテクノロジーをテーマにしているんです」

Ｉ　ではビンテージのメルセデスベンツにペインティングを施すというアイデアはどこから？

「クルマというのはテクノロジーの象徴でもあるので、これを使おうと思いました。また私自身も、50年代のクルマがとても好きです。ウィットがあり、なおかつ非常にスタイリッシュですから。そのクルマに私の自然のテーマである花、鳥、星、銀河、水滴などを描くことにより、クルマとテクノロジー、そして自然とのコンバインができるのではと考えたのです」

Ｉ　自然の大切さを改めて考えさせられる内容のようですが、ヤマガタ氏自身、具体的に環境問題などはどうお考えですか。例えば、アメリカは日本よりも環境問題に大変積極的で、その種の団体なども数多く存在しているようですが。

「確かに、環境破壊だとかブラジルの酸性雨だとか、地球を救おうという観点で切実な問題を討議している団体はアメリカやヨーロッパに数多くあります。しかし、そういう団体に関わっている人々を大勢見てきた私個人の意見としては、その種の団体の全部が全部、常に正しく誠実であるとは限らないということです。日本では多分、そんな団体の良い所のみが紹介されているのかもしれませんね。大袈裟に看板を掲げ地球保護を叫ぶ集団よりも、誰に誇示することなく自分のできる範囲で、自分の時間を地球のために使う。そんな人を私は知っていますし、大変尊敬しています。そういう姿勢こそが、本物なのだと思っています。」

Ｉ　では今回の『アースリーパラダイス』に関しても、そんな身近な自然の大切さに目を向けたということでしょうか。

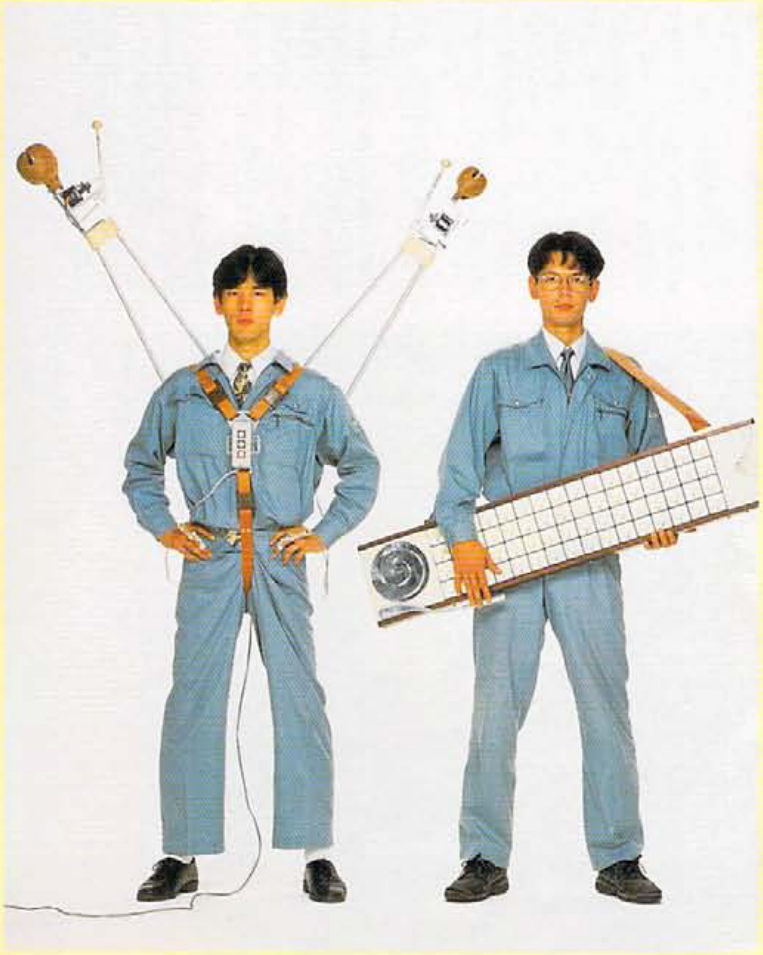
「はい。ルソーの自然主義じゃないですけど"自然に帰れ"と大声で啓蒙せずとも、注意さえして見れば自分の近くにもっと自然はあるんだと言いたいんです。例えば空が晴れたり曇ったり、素敵な虹が見えたり、綺麗な花が咲いていたり…。そんな身近にある四季に気づくことのほうが先なんじゃないかと。自然は、本当は私達のすぐ近くに存在しているんですよ」

取材・文／木村紀子

明和電機　インタビュー

戦後の電化製品みたいな、あんなジャンキーなノリがいい。

ミュージシャンか、はたまた電機屋か？機械オタクからOL・女子高生まで、異常な幅広い層に人気の明和電機。兵庫県出身の二人組。社長・副社長と名乗る土佐兄弟制作による"製品"は、石井竜也監督映画『河童』にも登場、好評を博した。また彼らのアバンギャルドともいえる摩訶不思議なパフォーマンスも、一度観たらば忘れられないとの反響を呼んでいる。一体彼らは何者なのか。そして彼らの奏でる"ツクバ・ミュージック"とは。謎の兄弟ユニット、明和電機に迫る。



ー　まずユニット名の『明和電機』ですが、これは冗談ではないですよね？

土佐正道（兄・社長）「はい、家業が電気屋で。継いでないですけど。ユニフォームもおやじの代からのなんです」

ー　明和電機誕生のきっかけは？

土佐信道（弟・副社長）「最初は兄弟二人でバンド活動してたんです。デジタル楽器が出た頃で、打ち込みをやってました。大学は別々で兄が経済で僕は芸術。2年前に僕が大学院を卒業し、兄もサラリーマンが面白くないと辞めたとこだったんで、じゃ一緒に何かやろうかと。ソフトよりもハードにのことだとずっと思ってましたから（笑）」

ー　ほかに類を見ないパフォーマンスなのでカテゴリー的に不明なんですけど、敢えて明和のジャンルはというと。

社・副「ツクバです」

ー　……は？

社「彼（副社長）が筑波大学だったんですけど。筑波ってすごく人工的な町なんです。沼地を埋め立てた広い場所で、電柱もなく辺りは研究所だらけで」

副「いわゆる、おじいさんとおばあさんもいないんです」

社「例えばデトロイトとかリバプールとか、あんな工業地帯みたいな、独自の音楽が流行る場所、そんな感じで。じゃ、それをそのまま僕らの音楽の名前にしてしまおうかと」

ー　ツクバですか……その説明がなければ、全くの意味不明ですね（笑）。具体的にはどんなもんなんでしょう。

社「シンセサイザーで満る音楽をスピーカーにはつながずに、僕らは機械的に、そして物理的に音を出す。それが"ツクバ"なんです。クリエイティブなんだけれどテクノロジー的という」

ー　は～深いですね。でも明和電機を全く知らない人に、どういうたぐいのユニットなのかを説明するのがこれまた至難の業なんですが。

副「よく言われますね。相手によって言い方を変えないと通じない。例えば現代美術の人には『現代美術界の狩人』って言ってるんです」

ー　（爆笑）なるほどいえてます。で、そんなお二人が作る"製品"なんですけど、何といったらよいのやら、まあとにかく変わってます（笑）。

副「僕らが作る製品は、楽器、武器、そして実験器具的なものに分かれます」

社「あと余興モノってのもある（笑）。戦後まもない頃って、電化製品がすごいジャンキーな物でしたよね。ああいうノリでできたら面白いですよね」

ー　同じ畑の人には共感を呼ぶんじゃないですか？ホントの電機屋さんとか。

社「エンジニアの人とかは結構厳しい。あと町に一人はいる発明オヤジみたいな人（笑）。手紙をくれたり、私のアイデアを見てくれって、いきなりファックスで設計図を送ってきたりするんです。勘違いしてるんですねえ（笑）」

ー　基本的に明和電機はミュージシャンですか？それともアーティスト？ミュージシャンなら、意識している音楽家なんかいますか？

社「ミュージシャンじゃないなあ。アーティストですね。意識してる人……昔は本田宗一郎に興味ありましたけど。あ、音楽家ですか？歌謡曲はWinkが好きですね」

ー　そういうご趣味でしたか（笑）。ところで、製品を作る際にコンセプトなんかはあるんでしょうか。

副「宇宙的だったらいい。海に近かったらいい。夢みたいなのとか……でも基本的には、バカバカしくなければダメ！ということですね（一同爆笑）。万博跡地ってあるでしょう。僕らのイメージはあれなんです。昔、いつか未来はああなると思っていた。でも今見ると実際はそうじゃない。コンピューターなんかが前面に出てきて、あれ？なんか違うなという気持ちがある」

社「最近、マルチメディアが流行ってますね。世の中便利になりそうだよ、なんて新聞なんかに書いてあるけど、実際コンピューターを使っている立場からいうと、案外退屈だなというイメージがあって。結局、通過してしまうと全然面白くなくなる。僕らみたいになっちゃうよ、という思いなんです」

ー　それはある種の危惧？

副「危惧じゃないですけど、あんまり面白くないよと。確かにコンピューターはすごい。でもそこに固執するよりも、それと同じくらい創造力を持てばこういう道もあるんだよと言いたいですね」

ー　例えばそれは、どこかに世紀末的危機を感じているということですか？

副「そう取られること、ありますね。僕ら、パフォーマンスで実際に魚を殺しちゃうんです。それが問題になりかけたこともありますけど、でも子供の頃って、平気で虫とか殺しちゃうのってありますよね。どちらかというとそのへんの感覚に近いかもしれない。結局は好奇心が勝っちゃう、というようなね」

取材・文／木村紀子
協力／ソニー・ミュージックエンタテインメント

EL-MALOインタビュー
クラブ発の異端ユニットが邦楽界に新風を撒き散らす？

コーネリアス小山田圭吾との共同プロデュース作の2nd『ザ・ウォースト・ユニバーサル・ジェット・セット』を発表した元東京リズムキングスの柚木隆一郎＋會田茂一によるエル・マロ。新作はそれまでと異なり、日本のベックかブライマル・スクリームか？といったロックなベクトルが爆発。シングル『ブラインド』は91年12月のFM802ヘビーローテーション曲としても話題。

I　巷でもFM802のヘビー・ローテーション曲『ブラインド』が話題ですよ。

會田「どういうつもりなんでしょうかねぇ802も（笑）」

柚木「光栄すぎて悪態しかつけないって感じですね（笑）」

I　歪んだ小学生みたいですね。でも今までいわゆるクラブ層辺りで支持されてたけど、今回はエル・マロって何だろうというリスナーにも聴かれてて。

柚木「それはありがたいことですよね」

I　あの曲のイメージからロッキンなイメージを持つ人も多いでしょうね。

會田「それでもいいし。もしはいり口が『イノセント・ワールド』（注：ミスチルの曲名／エル・マロは彼らと同じレコード会社所属）みたいな曲でアルバムもそうなら完璧中古盤屋直行じゃないですか。敢えて『ブラインド』みたいな曲で受け入れられた方がいい」

柚木「そしたら即行チルドレンの野郎真似しやがった。恩知らず（笑）」

I　社内でエル・マロみたいにしないと売れないよという動きがあったとか。

柚木「日本の音楽界僕らが基準ですよ」

會田「本当のどこちょっと認知されたかなとは思う。ライブ・ハウスやバンド・ブーム上がりじゃない別のところから出てきてて、なおかつロックぽいっていう。ほんの少しですけどね」

I　柚木さんは元東京リズムキングスで、エル・マロという名前はラテン風で。でも両者のサウンドは全く違う。

柚木「あのバンドの時の写真この雑誌に載ってるんだよね？恥ずかしい（笑）。あのバンド、基本的にそれぞれが全然違うから。例えばあのバンドは三世代に渡って、まず上野さん達、僕ら、でもっと若い人達という風に。と当然音の捉え方も違う。上野さん達が音で言うキッチュとかフェイクなら、僕らは不良ぽいとかって具合に。そういう感じでどんどん枝分かれした。ブーガルー自体はラテン・ロックだけど、やっぱり今とも全然関係ないよ」

I　ところで初の関西ワンマン・ライブも決まり楽しみですが、内容は？

會田「91年末に東京ではツインドラムでやったので、それくらいの音量とか機材を持ち込めたらと思ってます」

協力／キョードー大阪、TOY'S FACTORY

◆「EL-MALO 1st Live」
2月16日（木）7:00PM
クラブ・クワトロ／前売3500円　当日4000円
問合せ キョードー大阪
★06・345・2500

「ザ・ウォースト・ユニバーサル・ジェット・セット」
EL-MALO／3,000円（税込）
TOY'S FACTORY

三浦綺音インタビュー
生々しいウィスパーVOで、危うい少女の中のエロスが流れ出す。

'93年NHKのドラマでデビュー。勝新太郎による写真集「裸舞」で衝撃的ヌードを披露。エロティックな魅力で次代のアイドル＝ヌードルとして話題の三浦綺音（あやね）。今年21歳になる彼女が音楽でその才能を開花。フランス映画的な劇的な設定を生々しくエロティックな吐息VOで聞かせるデビュー作「微熱」。そこでは彼女の中の真のフレンチ・ロリータを確認することができる。

I　歌詞がかなりドラマティックな設定ですね。歌う時にイメージが湧かないなんてことはなかったですか？

「歌を歌うという感覚だと自分が大変になっていくから、物語を語る人になろうと思ったんです。だからイメージが湧かない時は大変。大抵大丈夫だったけど『サンドグレーの記憶』の"漁師"という表現だけがイメージできなくて。曲はフランスぽいのに言葉から浮かぶのは日本の漁師さん（笑）。でもフランスの漁師さんはお洒落だよ、ネクタイの起源も漁師さんの首のタオルだよ、と説得されて歌えました（笑）」

I　歌い方も生っぽくてスティーナとかシャルロット・ゲンスブール風で、いいですよね。

「友達のアレンジャーの人とかに"綺音ちゃんのあのフラット気味の声がいいね"なんて言われたり（笑）」

I　女優の歌は、昔のいしだあゆみさんとか"歌わされてる"風なとこがマニアはたまらなくセクシー（笑）。

INTERVIEWS

取材・文／早川加奈子

HAL FROM APOLLO '69 インタビュー
人工的な中に人間味感じる 次代のサウンドとボーカル

'89年に4人編成でスタートしたHAL FROM APOLLO '69。現在VOのHALとギター／プログラマーの山田貴久の2人組ユニット。'93年気鋭のミュージシャン福富幸宏プロデュースによるシングルでデビュー。'94年末にはキャッチーなロックを感じるシングル『スウィート・シング』をリリース。初ドイツ・ツアーも終え、来たる春には初のフル・アルバムも予定。待望のライブにも期待大。

ー　月並みですがドイツいかがでした？

HAL「ヨーロッパはライブの値段が安くて、バブ感覚で気軽にライブに触れられるし、音楽も生活の一部って感じがうらやましい。時間的にクラブに行ったりはあまりできなかったけど、ドイツもそうだと思います。私達のライブが幾らだったかは知らないけど（笑）」

山田「僕らもドイツの音楽にも影響されてますしね。カンとかノイバウテンとか。ベルリンは空気が違いましたね」

ー　HAL〜は歌詞もとても独特ですよね。記号化された暗号のようなものが秘められていて非常にイメージ優先。人称代名詞もほとんど使ってない。

山田「そこなんですよ。僕とか私とかって言うと、すごく限定されてしまう」

HAL「例えば日本語で自分を表す時、私、僕、俺、と何でもありですが、その選び方で既にすごくカラーが決まると思うんです。私は歌ってる時に自分が主人公になって歌ってるつもりもない。誰でもどういう状況でも自分をそこに投影できるっていうのが私達の音楽だと思うんです。その点でも人称代名詞はない方がいい。シンプルだし」

ー　だからHAL〜のサウンドは正に響き優先って感じで伝わるんですね。

HAL「音の響きは歌詞に置いても相当重要なものだと思います。歌う時も、歌詞の意味もそうですけど、響きをすごく気にしてます。正しい発音という意味じゃなくて、どこを伸ばすかとかそういう発音のことが一番気になるんですよ。色んなパターンの中から発音としてのサウンドが自分の感性と最もぴったりくるものを選んでいます」

ー　それはすごく感じますね。いわゆるボーカリストというよりも"肉体を持ったシンセサイザー"みたいな感じ。

HAL「（爆笑）それ格好いい！人間アンドロイド目指してがんばってます（笑）」

ー　色々と人工的なものが好きだとか。

HAL「ええ。でも結局人工的なものって人間が手を加えてるんですよね。私横浜に住んでてランドマークタワーの工事の時ずっと見てたんですけど、超近代的な建物だからどんなハイパーな機械で作ってるのかと思えば、実際はおっちゃんが作ってる（笑）。そういうことにすごく感動しましたね」

「スウィート・シング」
HAL FROM APOLLO '69
1,200円（税込）／東芝EMI

ー　"歌わされ"風なとこもレコーディング始め頃はあったかもしれない（笑）」

ー　綺音さんの女優やモデル時のエロス、体温と吐息が一緒に聞こえるエロティックな歌十狂気を秘めた危ない歌詞は綺音さんのミレーユ・ファルメール的ですよね。

「あ、それはまだ誰にも言われたことないけど、当たってます。ミレーユのことはスタッフの頭にあったみたい。でもそこからイメージしていくのがすごく面白かったんですよ」

協力／SIXTY、ロイド企画

「微熱」三浦綺音
3,000円（税込）／SIXTY